

親孝行

体育祭が終わり、彼岸花が咲き始めた9月中旬、父があの世に旅立ちました。享年87歳。

早くに戦争で父親を亡くしたため中学を卒業後就職、そして結婚し、私たち兄弟3人を育ててくれました。父らしく穏やかな最期でした。

人間にとって、死ぬということは、生まれること、成長すること、働くことなどとともに一つの仕事であると言われます。しかも、こればかりは、どのような人間にも公平に一回ずつ訪れます。

父の年齢から覚悟はしていたつもりでしたが、初七日が過ぎた頃から少しずつですが寂しさを感じると同時に、若い頃どこかで目にしたことばを思い出します。

それは、「親というのは、子どもからすると死というものの前にある『**衝立（ついたて）**』のようなものである。子どもは、親がいる間は、死というものを身近に感じることはないが、その『**衝立（ついたて）**』がはずれた途端に、死というものが自分のすぐ近くに迫っていることを感じるのだ」というような内容でした。

今、私自身はその意味を改めて感じると同時に、父の死を通じて「**親孝行**」の大切さを生徒へも伝えたいと思っています。

彼岸花が咲き誇る季節。

進学・就職の面談で校長室に訪れる3年生には「親を大事に」「親孝行な子どもになれるよう頑張れ」と伝えているところです。

親は、自分のことはおいて、我が子の成長を願います。

今、3年生にとっては、進学・就職に向けて一生懸命に汗をかくことが**親孝行**です。

そして、やがては自分の幸せをつかむことはもちろん、お世話になった親に幸せを与えられる人になって欲しいと願いながら激励をしています。